令和5年度

桐蔭学園　高等学校　学力検査問題

国　語

令和5年2月11日　施行

注意事項

１．試験開始の合図があるまで、この冊子の中を見てはいけません。

２．机の上には、鉛筆・消しゴム・受験票・座席券・時計以外のものを置いてはいけません。受験生どうしの貸し借りもできません。また、机の中には、自分のマークシート冊子以外、何も入れてはいけません。

３．スマートフォンは、必ず電源を切って、かばんの中に入れておいてください。

４．問題冊子の印刷が見えづらかったり、ページが不足したりしている場合、また、鉛筆を落としたり、体の調子が悪くなったりした時は、だまって手をあげてください。

５．問題冊子の余白などは、自由に利用してかまいませんが、どのページも切りはなしてはいけません。

６．問題は２２ページまであります。

７．問題冊子は持ち帰ってください。

第一問　次の⑴・⑵の問いに答えなさい。

⑴ A～Dの各文について、傍線部のカタカナと同じ漢字を用いるものを、それぞれの選択肢の中から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

A　気の置けない仲間とカイショクを楽しむ。

1. 専門家のカイシャクを参考に議論を進めた。
2. カイケイをすませて急いでお店を後にした。
3. 新しい技術をショウカイする任務についた。
4. 農作物にカイメツ的な被害が出る予測がある。

B　飛行機のソウジュウを疑似体験した。

1. 工場現場のジュウキに不用意に近づいてはいけない。
2. 転勤に伴い、キョジュウ地を変えた。
3. ジュウライの方法では対応できない。
4. トンビはジュウオウ無尽に空を飛び回った。

C　日本の人口は減少ケイコウに転じている。

1. カウンセリングにおいてケイチョウすることが重要だ。
2. 科学のさまざまなオンケイを受けている。
3. 農業でセイケイを立てていく覚悟をもつ。
4. 伝統芸能をケイショウする若者を求めている。

D　キョウヨウとして新聞に目を通すようにしている。
1. 植物は根からヨウブンを吸収している。
2. 江戸時代のヨウカイはユニークなものが多い。
3. 主催者からのヨウセイを受けて対策を強化した。
4. 会員になるとセンヨウの個室が与えられる。

(2) E・Fの各文の傍線部について、これとは異なる意味を持つ漢字を、それぞれの選択肢の中から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

E　自然災害が起こる可能性は常にあることを実感した。
1. 鉄道開業の起テンとなった新橋を訪れる。
2. 言語の起ゲンをたどるとその国の文化が見えてくる。
3. 山頂に続く道は起フクが激しく交通渋滞が多い。
4. 不注意に起インする事故を防ぐアイディアを募集する。

F　学園祭の運営スタッフについて学年を問わず募る。
1. ネットを使うと簡易に問シンを受けられる。
2. 高齢者施設をホウ問して食事の支援を行う。
3. 過去の言動について厳しく問セキされた。
4. 素朴なギ問のなかに研究につながる種がある。

第二問　次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

日本語には、触覚に関する二つの動詞があります。

① さわる
② ふれる

英語にするとどちらも「touch」ですが、それぞれ微妙にニュアンスが異なっています。たとえば、怪我（けが）をした場面を考えてみましょう。傷口に「さわる」というと、何だか痛そうな感じがします。さわってほしくなくて、思わず患部を引っ込めたくなる。

では、「ふれる」だとどうでしょうか。傷口に「ふれる」というと、状態をみたり、薬をつけたり、さすったり、そっと手当てをしてもらえそうなイメージを持ちます。痛いかもしれないけど、ちょっと我慢してみようかなという気になる。

虫や動物を前にした場合はどうでしょうか。「怖くてさわれない」とは言いますが、「怖くてふれられない」とは言いません。物に対する触覚も同じです。スライムや布地の質感を確かめてほしいとき、私たちは「さわってごらん」と言うのであって、「ふれてごらん」とは言いません。

不可解なのは、気体の場合です。部屋の中の目に見えない空気を、「さわる」ことは基本的にできません。ところが窓をあけて空気を入れ替えると、①冷たい外の空気に「ふれる」ことはできるのです。

抽象的な触覚もあります。会議などで特定の話題に言及することは「ふれる」ですが、じっくり話すわけではない場合には、「ほんのさわりだけ」になります。あるいは怒りの感情はどうでしょう。「逆鱗（げきりん）にふれる」というと怒りを爆発させるイメージがありますが、「［A］にさわる」というと必ずしも怒りを外に出さず、イライラと腹立たしく思っている状態を指します。

つまり私たちは、「さわる」と「ふれる」という二つの触覚に関する動詞を、状況に応じて、無意識に使い分けているのです。もちろん曖昧な部分もたくさんあります。「さわる」と「ふれる」の両方が使える場合もあるでしょう。けれども、そこ

に私たちは微妙な意味の違いを感じとっている。同じ触覚なのに、いくつかの種類があるのです。

哲学の立場からこの違いに注目したのが、坂部恵（さかべめぐみ）です。②坂部は、その違いをこんなふうに論じています。

愛する人の体にふれることと、単にたとえば電車のなかで痴漢が見ず知らずの異性の体にさわることとは、いうまでもなく同じ位相における体験ないし行動ではない。

一言でいえば、ふれるという体験にある相互※1嵌入（かんにゅう）の契機、ふれることは直ちにふれ合うことに通じるという相互性の契機、あるいはまたふれるということが、いわば自己を超えてあふれ出て、他者のいのちにふれ合い、参入するという契機が、さわるということの場合には抜け落ちて、ここでは内-外、自-他、受動-能動、一言でいってさわるものとさわられるものの区別がはっきりしてくるのである。

「ふれる」が［B］的であるのに対し、「さわる」は［C］的である。ひとことで言えば、これが坂部の主張です。

言い換えれば、「ふれる」は人間的なかかわり、「さわる」は物的なかかわり、ということになるでしょう。そこにいのちをいつくしむような人間的なかかわりがある場合には、それは「ふれる」であり、おのずと「ふれ合い」に通じていきます。逆に、物としての特徴や性質を確認したり、味わったりするときには、そこには相互性は生まれず、ただの「さわる」にとどまります。

重要なのは、相手が人間だからといって、必ずしもかかわりが人間的であるとは限らない、ということです。坂部があげている痴漢の例のように、相手の同意がないにもかかわらず、つまり相手を物として扱って、ただ自分の欲望を満足させるために一方的に行為におよぶのは、「さわる」であると言わなければなりません。傷口に「さわる」のが痛そうなのは、それが一方的で、さわられる側の心情を無視しているように感じられるからです。そこには「ふれる」のような相互性、つまり相手の痛みをおもんぱかるような配慮はありません。

もっとも、③人間の体を「さわる」こと、つまり物のように扱うことが、必ずしも「悪」とも限りません。たとえば医師が患者の体を触診する場合。お腹の張り具合を調べたり、しこりの状態を確認したりする場合には、「さわる」と言うほうが自

然です。触診は、医師の専門的な知識を前提とした触覚です。ある意味で、医師は患者の体を科学の対象として見ている。この態度表明が「さわる」であると考えられます。

同じように、相手が人間でないからといって、必ずしもかかわりが非人間的であるとは限りません。物であったとしても、それが一点物のうつわで、作り手に思いを馳せながら、あるいは壊れないように気をつけながら、いつくしむようにかかわるのは「ふれる」です。では「外の空気にふれる」はどうでしょう。対象が気体である場合には、ふれようとするこちらの意志だけでなく、実際に流れ込んでくるという気体側のアプローチが必要です。この出会いの相互性が「ふれる」という言葉の使用を引き寄せていると考えられます。

人間を物のように「さわる」こともできるし、物に人間のように「ふれる」こともできる。このことが示しているのは、「ふれる」は容易に「さわる」に転じうるし、逆に「さわる」のつもりだったものが「ふれる」になることもある、ということです。

相手が人間である場合には、この違いは非常に大きな意味を持ちます。たとえば、障害や病気とともに生きる人、あるいはお年寄りの体にかかわるとき。④冒頭に出した傷に「ふれる」はよいが「さわる」は痛い、という例は、より一般的な言い方をすれば「ケアとは何か」という問題に直結します。

ケアの場面で、「ふれて」ほしいときに「さわら」れたら、勝手に自分の領域に入られたような暴力性を感じるでしょう。逆に触診のように「さわる」が想定される場面で過剰に「ふれる」が入ってきたら、その感情的な湿度のようなものに不快感を覚えるかもしれません。ケアの場面において、「ふれる」と「さわる」を混同することは、相手に大きな苦痛を与えることになりかねないのです。

あらためて気づかされるのは、私たちがいかに、接触面のほんのわずかな力加減、波打ち、リズム等のうちに、相手の自分に対する「態度」を読み取っているか、ということです。相手は自分のことをどう思っているのか。あるいは、どうしようとしているのか。「さわる」「ふれる」はあくまで入り口であって、そこから「つかむ」「なでる」「ひっぱる」「もちあげる」など、さまざまな接触的動作に移行することもあるでしょう。こうしたことすべてをひっくるめて、接触面には「人間関係」があります。

この接触面の人間関係は、ケアの場面はもちろんのこと、子育て、教育、性愛、スポーツ、看取(みと)りなど、人生の重要な局面で、私たちが出会うことになる人間関係です。そこで経験する人間関係、つまりさわり方／ふれ方は、その人の幸福感にダイレクトに影響を与えるでしょう。

「よき生き方」ならぬ「よきさわり方／ふれ方」とは何なのか。触覚の最大のポイントは、それが親密さにも、暴力にも通じているということです。人が人の体にさわる／ふれるとき、そこにはどのような緊張や信頼、あるいは交渉や譲歩が交わされているのか。つまり触覚の倫理とは何なのか。

触覚を担うのは手だけではありませんが、人間関係という意味で主要な役割を果たすのはやはり手です。さまざまな場面における手の働きに注目しながら、そこにある触覚ならではの関わりのかたちを明らかにすること。これが本書のテーマです。

私がこの問題に関心をもつようになったきっかけは、単純に、人の体にさわる／ふれる経験が増えたからです。

私は、目が見えない人や耳の聞こえない人、※2吃音(きつおん)のある人、四肢を切断した人など、さまざまな障害とともに生きる人が、その体をどのように使いこなし、それとどのように付き合っているのか、ご本人にインタビューをしながら研究をすすめています。インタビューというのは実はインタビュー以外の時間が重要で、その人が待ち合わせ場所で待っているときの姿勢や、コンビニで買いものをするときの様子、信号の渡り方など、何気なく行われるそうした動作にたくさんのヒントが含まれています。

特に目の見えない人とかかわる場合、インタビュー以外の時間は、その人を介助する時間でもあります。具体的には、自分の肘(ひじ)や肩に手を添えてもらい、インタビューを行う場所まで一緒に移動するのです。

その介助が、私はとても下手くそなのです。単に勉強不足で、アドリブの我流でやっているからなのですが、毎回新鮮な気持ちでドキドキしてしまいます。慌てて階段を斜めに上っては(階段は段差に対して垂直に進むのがセオリー)、「だめだよ～」と当事者に注意される始末。「介助できない研究者」と笑われています。

それでも、触覚を通じて人と関係をつくるそうした機会は、私にとってはとても楽しい時間です。介助のスキルも大事なのですが、そこにはスキル以上の、何か重要な学びがあるように思えるのです。それは、このような研究を始めるまえの、文学

部出身者らしく書庫の奥で文献を漁(あさ)っていた時にはなかった、「触覚の目覚め」を私にもたらしました。

「目覚め」をさらに押し進めたのは、視覚障害者向けのランニング伴走体験でした。目の見えない人を伴走する体験も面白かったのですが、特に衝撃を受けたのは、その逆、つまり自分がアイマスクをして目の見える人に伴走してもらう、⑤ブラインドランの体験でした。

最初にアイマスクをして走ることになったとき、私はパニックに近い恐怖に襲われていました。伴走者といっしょに走るには、小さなロープを輪っかにして、その両端をブラインドランナーと伴走者がそれぞれ握り、腕の振りをシンクロさせながら横に並んで走ります。ロープを介しているので間接的な接触になりますが、それでも相手の動きや意図を、ロープを通してしっかりと感じることができるはずでした。

ところが、いざ走ろうとすると、周囲が確認できないことによる恐怖で、どうしても足がすくんでしまうのです。視覚を遮断しているにもかかわらず、木の枝や段差など行く手を阻むものがそこに「見えた」ほどでした。

けれども、ある瞬間に覚悟を決めました。伴走をしてくれているのは、サークルのリーダーも務める、ベテラン中のベテランです。この方の素晴らしい導きと、これまでにたくさんの視覚障害者たちが視覚を使わずに走ってきたという歴史がある。それを信じて、身をあずけてしまおう。そう［D］のです。

それ以降の時間の、何と心地よかったことか。最初は歩くことしかできませんでしたが、すぐに走れるようになり、二〇分ほど走ったあとには、全身が経験したことのないような深い快感に包まれていました。

同時に私は愕然(がくぜん)としました。自分がそれまでいかに「人に身をあずける」ということをしてこなかったか、ということに気づかされたのです。まるで拾われてきた猫みたいです。人を信じようとせず、誰(だれ)からも距離をとろうとして、そのことを自立と勘違いしてきたのかもしれない。それは脳天に衝撃が走るようなショックでした。

目が見えると、外界から得る情報は視覚に頼りがちになります。同じように、人間関係もまた、視覚に依存しがちになります。目があったら挨拶するし、逆に関心がないことを示すために［E］こともあります。「目上の人」「お目にかかる」といった言い回しも視覚の重要性を表しているし、口先の言葉よりも目にこそ本心が宿ると考えられたりもします。本書では文化ごとの接触の度合いの違いに触れることはしませんが、特に日本のようなハグや握手の習慣がない社会では、視覚の割合はい

っそう高くなりがちです。

ブラインドランが教えてくれたのは、視覚だけが他者と関係する手段ではない、という当たり前の事実でした。

視覚は相手との距離を前提にした感覚なので、人間関係にも、距離をもたらします。ところが、触覚は違います。信頼して相手に身をあずけると、あずけた分だけ相手のことを知ることができる。そんな人間関係もあるのです。

「まなざしの人間関係」から「手の人間関係」へ。目の見えない人との関わりが教えてくれたのは、そんな認識論と倫理学が交わる領域でした。

（伊藤亜紗『手の倫理』より）

※1嵌入（かんにゅう）……はめ込むこと。また、はまり込むこと。

※2吃音（きつおん）……話し言葉が滑らかに出ない発話障害のひとつ。

問1　傍線部①「冷たい外の空気に『ふれる』ことはできるのです」とありますが、それはなぜだと筆者は考えていますか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

1．気体の場合には、流れている空気に、ふれようとする人間が自分自身の意志で近づいていくから。
2．気体の場合には、流れている空気に無意識に人間が近づいていくことで、両者の出会いが生まれるから。
3．気体の場合には、ふれようとする人間にそのつもりがなくても、流れ込んでくる空気の方から近づいてくるから。
4．気体の場合には、ふれようとする人間に流れ込んでくる空気が近づいてくることで、両者の出会いが生まれるから。

問2　本文中の空欄Aに当てはまる語として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

1．核心　　2．腫物（はれもの）　　3．琴線　　4．神経

問3　傍線部②「坂部は、その違いをこんなふうに論じています」とありますが、引用部の本文中での役割を説明したものとして適切でないものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

1．筆者が論じようとしている内容を端的に示す説明を紹介することで、論点を整理する役割。
2．哲学者の言葉を引くことで、ここまでの話題が単なる思いつきでないことを証明する役割。
3．これまで支配的だった考え方を筆者の考え方と対置させることで、筆者の独自の立場を際立たせる役割。
4．過去の文献を引くことで、触覚にまつわる日本語について以前から指摘されてきたことを確認する役割。

問４　本文中の空欄Ｂ・Ｃに当てはまる語の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

1．Ｂ−相互　　Ｃ−一方
2．Ｂ−意識　　Ｃ−無意識
3．Ｂ−能動　　Ｃ−受動
4．Ｂ−非人道　　Ｃ−人道

問５　傍線部③「人間の体を『さわる』こと、つまり物のように扱うことが、必ずしも『悪』とも限りません」とありますが、なぜですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

1．医療現場においては、医師が患者に対して配慮しながら「さわる」ことで、患者は安心して医師との関係性を築けるから。
2．医療現場で医師が触診をするような場合には、感情を抜きにして患者の体を科学の対象として「さわる」必要があるから。
3．医療に関わる専門的な知識を持っている人たちには、患者に対して感情を抑制しながら「さわる」ことが求められるから。
4．「ふれる」は相互の合意が必要だが、触診は医師が医療行為として患者の合意なしに「さわる」ことが認められているから。

問６　傍線部④「冒頭に出した傷に『ふれる』はよいが『さわる』は痛い、という例は、より一般的な言い方をすれば『ケアとは何か』という問題に直結します」とありますが、なぜですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

1．私たちは相手との関係性の中でいかに接触するか無意識にその都度判断しており、それによっては人間関係が崩れる危険性を常にはらんでいるから。

2．私たちは接触面の力加減などから相手の「態度」を読み取って関係性を築いており、接触が自身の幸福感に直接影響を与えるものであるから。

3．私たちは「ふれて」ほしいときに「さわら」れたら勝手に自分の領域に入られたような暴力性を感じ、相手に対して心を閉ざしてしまうものだから。

4．私たちは相手と関係を築く際に相手の痛みに思いを寄せるあまり、自分自身の身体について考える余裕を持てず過剰な負担を抱えていることが少なくないから。

問7　傍線部⑤「ブラインドランの体験」とありますが、この体験によって筆者はどのようなことに気づいたのでしょうか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

1．外界から情報を得る際や人間関係を構築する場面でも視覚に頼りがちだが、視覚だけが他者と関係する手段ではないということ。

2．目で見えていることは世界の一部でしかなく、他の五感を研ぎ澄ませることで当たり前に過ごしていた日常がより鮮明に捉えられるということ。

3．自分がそれまでしてこなかった、人を信じて「人に身をあずけ」たことによって、自立の根源的な意味を理解することができるということ。

4．ブラインドランのような直接的な接触によって触覚が目覚め、座学では得られない、それまで経験したことのないような快感を得ることができるということ。

問8　本文中の空欄D・Eに当てはまる語句として最も適切なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

D　1．腹をくくった　2．腹を割った　3．腹に収めた　4．腹にすえかねた

E　1．目が泳ぐ　2．目がくらむ　3．目を細める　4．目を逸(そ)らす

問9　筆者の伊藤亜紗（いとうあさ）さんは自身のホームページでさまざまな人から触覚にまつわるエピソードを集める「『私の手の倫理』プロジェクト」を行っています。そこで本文を読んだ四人の生徒がそれぞれ自分のエピソードを書いて投稿してみようということになりました。その文章のうち、本文の内容を明らかに誤読しているものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

1．親戚が赤ちゃんを出産し、私もお手伝いとして一緒に過ごす時間があります。言語を習得する前なので泣いていてもどのように気持ちを汲（く）めば良いかわからず途方に暮れていました。しかし、実際に抱っこをしたり、くすぐり遊びをしていると握り返したり、笑ったりと少しずつやりとりができるようになりました。親戚は赤ちゃんと触れ合っていることで自分が親になったという自覚が芽生えたと話していました。

2．私はラグビー部に所属しており、選手同士が体を密着させ、敵と味方で押し合いながらボールを奪い合うスクラムを組む場面があります。その際、仲間と声をかけ合いコミュニケーションを絶やさないことを大切にしていますが、その余裕がない時もあります。そのため体を密着させている仲間がどちらに力を傾けているかその接触面から読み取り、縦方向に力を伝えるためにどのように動けばよいか考えています。

3．感染症対策で人と外で会うことが減った一方で、オンラインで知り合い、親しくなった方もいます。先日、その方と初めてお会いする機会があったのですが、直接お会いして物理的な距離感に実感が伴ったことで「触覚の目覚め」が自分のなかで起こり、より親しくなれました。オンラインでは伝わりづらい背の高さなどの身体的特徴や、細かな表情の変化を見とれることでコミュニケーションがスムーズになったからだと思います。

4．引っ越しのために部屋を片付けていると、小学校の時に使っていたリコーダーが見つかりました。指を穴に合わせて持ってみると、窮屈で自分の手が大きくなったことを実感しました。ぶつけてへこんだあとや吹き口の歯跡をなぞると、当時うまく音が出せず悔しがっていたことを思い出しました。相手が人間ではないものだとしても、「ふれる」ことでものとの対話、過去の自分との対話が生まれるのだと感じました。

第三問　次の文章は、鎌倉時代後期に成立した『沙石集』の一節です。これを読んで、後の設問に答えなさい。

中比、※1武州に、※2境間近きほどに、互ひに睦ぶ俗ありけり。一人は家貧しく、一人は豊かなりけり。さるままには、常に借物なんどしけり。

さて、ともに死にて、かの一人の子の夢に見えけるは、亡父来たりてよにもの嘆かしき気色にていひけるは、「某殿の物をいくいくら借りて、返さざりしほどに、あの世にて責めらるるが堪へがたきに、かの子息のもとへ返すべし」と（a）告ぐ。①夢さめて、親の時よりの※3後見に、事の子細を尋ねければ、「さる事侍りき。御夢に違はず」と（b）いふ。さて、「不思議の事なり」とて、急ぎ※4員数のごとく沙汰して、かの子息のもとへ、「②かかる子細侍れば、かの借物、沙汰しまゐらする」よし、くはしく（c）申し送りけり。

かの子息、返事に申しけるは、「③この物、いかでか我が身に給ふべき。あの世にて、※5某が父、（d）責め参らせん上に、また重ねて給ふべからず」とて返しけり。押し返し送りていはく、「この世にて沙汰し参らせざらんにつきてこそ、あの世にて責められ参らせ候へ。親の嘆きを休め、④夢の告げを違へじと思ひ侍り。まげて取らせ給へ」とて遣りけり。またいひけるは、「親の事を重く思ひ、いたはしく存ずる事は、誰も劣り参らすべからず。されば、あの世にて、親にこそ取らせたく思ひ候へ。ここにて我が身に給はるべきやう候はず」とて（e）返しけり。

たびたび問答往復して、事ゆかざりければ、鎌倉に上りて対決しけり。※6奉行人より始めて、上にも下にも、聞き及ぶ類、「⑤かかる珍しくあはれなる沙汰、未だ聞かず。至孝の志、世間の理も、深くわきまへ存ずるにこそ」と、ほめののしりけり。⑥心ある人は、涙を流してぞ感じける。

さて、「件の物を以て、両人の亡父の菩提を弔ふべし」と下知せられければ、国に下りて、二人、亡父のために仏事を営みけり。まことにありがたかりける賢人なり。

※１武州（ぶしう）……武蔵（むさし）の国。現在の東京都、埼玉県、神奈川県の一部に当たる。
※２境間（さかひ）近き……地域が近い。
※３後見（うしろみ）……後見人。財産管理を補佐する人。
※４員数（いんじゅ）のごとく……借りた数のものを。
※５某（それがし）……わたくし。男性の自称。
※６奉行人（ぶぎやうにん）……裁判官の役割を担当する者。

問1　二重傍線部（a）～（e）の動作の主語として適切なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。ただし、同じ番号は二度以上選べません。

1．かの一人の子　2．亡父　3．某殿（それがしどの）　4．かの子息　5．後見（うしろみ）

問2　傍線部①「夢さめて」とありますが、「かの一人の子」は夢からさめて、まずどのように行動したのですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

1．夢の内容の真偽を確かめようと後見人を訪ねた。
2．亡き父が辛そうに嘆いていたのでお墓参りに行った。
3．亡き父の心痛を解こうと父の借金の返済のために出かけた。
4．夢の内容について親しくしている人に相談の手紙を送った。

問3　傍線部②「かかる子細侍れば、かの借物、沙汰しまゐらする」とありますが、この部分の意味内容として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

1. 夢で告げられた内容が過去にあった出来事と一致していることがわかり気味が悪いので、借りたものを返しにいく。
2. まるで現実で起きているかのような夢を見たが、あくまで夢だったので、借りていたものは返さないでおく。
3. 夢に亡き父が現れて生前借りたものを返すようにと告げたので、借りていたものを取りそろえて届ける。
4. 借りていたものを返さずにいたら、夢のなかで亡き父に責めたてられたので、急いで届ける準備を始める。

問4　傍線部③「この物、いかでか我が身に給ふべき」とありますが、「かの子息」はなぜこのように考えたのですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

1. 亡き父の偉大さを知っているからこそ、いくら父に直接返すことができないとはいえ、自分がそのような立派なものを受け取ることに抵抗を感じるから。
2. 亡き父があの世で借り手の親に返却を迫っていることを知って申し訳なく思い、その上父が貸したものを自分が受け取る理由がないから。
3. 亡き父はそもそも初めから返してもらわないつもりで貸していたので、今さら受け取ってしまうとあの世に行った時に父に責められてしまうから。
4. 亡き父の代わりに貸したものを受け取るのはよいが、実際に何を貸したか明確にわかっていない状態でうかつに受け取るわけにはいかないから。

問5　傍線部④「夢の告げ」とありますが、その内容の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

1．生前に譲ってもらったものを返してほしいと求められたが、ここではどうにもならないので、代わりにその方の子息に説明しに行ってほしい。

2．生きていたころ近い場所に住み親しくしていた裕福な方からものを借りたまま返せていないが、そのことをあの世で責められて辛いので、その方の子息にものを返しに行ってほしい。

3．家が近いことから親しくしていた裕福な方からものを借りたものの、経済的余裕がなくて返せないので、代わりにその方の子息におわびに行ってほしい。

4．親しくしていた裕福な方から常にものを借りるような生活だったため、いざものを返そうと思っても何から返せば良いかわからないので、後見人に相談に行ってほしい。

問6　傍線部⑤「かかる珍しくあはれなる沙汰」とありますが、その内容の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

1. 「かの一人の子」は親が貸したものを親の死後その子から返してもらうのは変だと言い、「かの子息」は親が借りたものを親の死後貸し手の子に返そうとしていること。
2. 「かの一人の子」は親が借りたものを親の死後借り手の子が返すのは道理に合わないと言い、「かの子息」は親が借りたものは親が死んでも子が返すのは当然だと言っていること。
3. 「かの一人の子」は親が借りたものを親の死後貸し手の子に返そうとし、「かの子息」は親が貸したものを親の死後その子から返してもらうわけにはいかないと言っていること。
4. 「かの一人の子」は親が貸したものを親の死後その子が返すべきものだと言い、「かの子息」は親の借りたものを親の死後子に返せと言うのはへりくつだと言っていること。

問7　傍線部⑥「心ある人は、涙を流してぞ感じける」とありますが、「心ある人」は何に心を動かされたのか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

1. 親が借りたものでも子が誠実に返そうとしたことが、世間でも高く評価されていること。
2. 奉行人が互いの考えをよく聞いたうえで、それぞれの立場を尊重した判断を下したこと。
3. 家の貧富の差を問わず親が子を思う気持ちは強く、子もまた親の思いを理解していること。
4. どちらの子も自分の親の思いを大切にしており、倫理的な規範も心得ていること。

問８　次の文章は中世（鎌倉時代）における夢の役割について論じた酒井紀美『夢語り・夢解きの中世』の一部です。そのあとの１～４はこれを読んだ上で『沙石集』の本文について述べた意見です。その中で最も適切なものを一つ選び、その番号をマークしなさい。

夢と覚醒の世界との関係は、むかしから人びとにとって大問題であった。『沙石集』は、この難問について次のように語る。

自分たちが「現」と思って生きている現実は、実は「夢」である。「現」と「夢」とは同じものなのだから、これを明瞭に分けることなどできない。だから古人も「昨日の現、今日の夢」と言っているではないか。三界の輪廻・四生の転変、皆これは煩悩の中で生きている者の見る妄想の夢である。それに対して、本覚不生の心地、つまり仏生常住の境地に至れば、眠りもないし夢もない。

ここでは、「夢の世界」と「現実世界」とを等価のものとしてイコールで結び、この二つの世界を隔てるものなど何もないのだと位置づけたうえで、それらをはるかに超越した別の絶対的な世界として「仏生常住の境地」を対置させる。

「夢」は「現」であり「現」は「夢」であるなどというと、わたしたちは、自分たちが現実に生きている世界と夢は同じなのだから、われわれの人生なんて夢や幻のようにはかないものだ、という考え方を導き出しがちである。しかし、それは今日の夢意識にとらえられた見方である。世の人びとの意識のなかでは、夢は神仏のメッセージを人びとに伝えてくれるとても重要なものだった。彼らにとって、夢は決してはかないものではなく、それは現実に自分たちが生きている世界に匹敵する重みと価値をもったもの、現実世界とイコールで結ばれるほどに存在感のあるものとして意識されていた。「夢」と「現」がむなしくはかないものとされるのは、あくまでも「仏生常住」の世界との対比においてである。その点を、わたしたちは見落としてはならない。

1．「現」と「夢」とは同じであるという認識があり、それ故に「かの一人の子」は自身が亡くなった後も「夢の世界」で亡き父に再会し、ものを返さなかったことで責められるのを避けるために必死に立ち回っていたともいえるだろう。

2．「かの一人の子」が夢を見たことが発端となって対決したが、奉行人は絶対的な世界として「仏生常住の境地」の尊さを心得ていたために両人の亡き父の菩提を弔うように命じ、周囲からも称賛されたのだろう。

3．本文では親を思う気持ちの強さに関心が向けられているが、当時、夢は神仏のメッセージを伝えるものだと考えられており、「かの一人の子」は自分の意思とは一切関係なく夢の教えに従う切迫感につき動かされていただけなのだろう。

4．借りたものを返しに行ってほしいと告げる父の姿は「夢の世界」でのことだと「かの一人の子」は認識しているが、それは現実に匹敵する重みがあると考えられたため、ものの返却にこだわったのだろう。